冬夜転生

しーれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬夜転生

【Ｎコード】
Ｎ５５８８Ｚ

【作者名】
しーれん

【あらすじ】
女神転生、ペルソナの世界観を元にしたオリジナルストーリーです。
駄文、迷走、勢い、転生、チートですが、苦手な方はご遠慮ください。

一日目（前書き）

本作品はあまり深く考えずに楽しんで読んで頂けるとうれしいです。

一日目

私は転生した。

神の気まぐれか、暇つぶしか……。

「もしかすると、神以外の仕業かも知れないな」

何故転生したのか？

前世で何か悪行をして生きてきた訳でもない。

むしろ何も成さなかったのが原因か？

「誰の仕業か知らないけど……私を、いや僕を転生させた事を後悔させないとな」

二回目の人生において、僕の生き方が決まった瞬間でもあった。

――――――電車内

転生してから十五年が経ち、高校生となった僕は祖父の家に向かっている。
理由としては両親が先月、仕事中の事故で逝った。　葬式の際に涙が流れなかったのは内緒である。
祖父が後見人となってくれたが、僕が一人暮らしをしたいと言う主張を認めてくれなかった。

そのせいもあって、通う予定だった学園から神門市（みかどし）にある私立将門学園（しりつまさかどがくえん）に変更となった。
通う予定だった学園もだが、今回通う学園も前世には無かったため調べた。
正直な話、調べれば調べるほどこの世界はデタラメだった。　メシア教もあればガイア教もある。

そこまでは良かったのだが、明らかに悪魔が関与してる事件が多すぎた。
悪魔に関与することは秘匿しようとしているのか、起きた事件の八割は全て迷宮入りになっていた。
もう笑うしかない。　そんな事を考えていると電車内にアナウンスが流れた。

「神門駅〜、神門駅〜、お忘れ物が無いようお降り下さい」

電車が駅に着いた所で降り、僕は持っていた鞄を背負って改札へ向かった。

「え〜と、確か駅前の隙間（すきま）商店街を通り抜けて、二つ目の曲がり角を左に曲がる。

道なりに歩いて五分ほどで細くなった道に入るので歩き続ける……」

地図を見つつ、教えられていた通り進む。　そして細くなった道に入った所で激しく違和感を感じる。

先ほど通ってきた隙間商店街と比べ、今歩いている道には人はおろか生物の気配が無かった。

しかし、気にしても仕方ないので地図を片手に歩き出すと、前方から車椅子に乗った人が見えた。

「嫌な予感しかしないのは何故だろう……」

相手も僕に気づいたようで、その際に少し驚いた顔をしていた。

「そこ行く少年よ少し尋ねたいのだが……君は何故ここにいる？」

「え？　祖父の家行くためですけど？」

さも当然のごとく答える僕に対し、車椅子のおっさん？はしかめっ面をしている。

「特に用が無いのであれば行きますけど？」

「……待ちなさい、これを受け取ってくれないか？

見た目は折りたたみ式の携帯電話だが、何れは君に必要になるはずだ」

「貰えると言うのであれば貰いますが、良いんですか？

今の時代だと折りたたみ式の携帯電話は珍しいと思いますけど」

「問題ない、大丈夫だ。　何せ私が作った物だからね、誰にも文句は言わせんよ」

ありがたく携帯電話を貰うこととなったが、僕は恐らくＣＯＭＰだろうとあたりをつけていた。

「渡しておいてなんだが、それは後一日で電池が切れてしまう。充電方法に関しては中に入っている説明アプリが教えてくれる。それではな！」

「あ、ちょ名前を……」

車椅子のおっさん？は渡すだけ渡して、名前もつけずに行ってしまった。

去る際に、車椅子がバイクの様に疾走していったのは見なかったことにしよう。

「やっぱり携帯型ＣＯＭＰ（以降ＣＯＭＰ）かぁ……。　電池はマグネタイトね、って後１０しかないよ！

なるほど、一時間で１マグずつ減って行くのか……残り十時間てことか」

僕は祖父の家に向かいながら説明アプリを読み漁った

ちなみに、他に入っていたアプリはこんな感じだ。

1. 悪魔召喚（サモン）アプリ
2. 悪魔分析（アナライズ）アプリ
3. 悪魔探知（エネミーソナー）アプリ
4. 道具格納（アイテムストア）アプリ
5. 異界探知（アナザーソナー）アプリ

僕は説明アプリを読んだ後に異界探知アプリを使うと【ここ　異界　よかたね】とメッセージが表示された。
個人的には地図が表示されて異界がある方を矢印で教えてくれると思っていた。
正直な話、無くても良いレベルのアプリだった。

次に道具格納アプリ、生物以外なら三個まで入るらしい。
同種であればさらに三個入ると説明アプリには書いてあったが、同種の条件が厳しすぎた。
材質、形状、状態が全て一致しないと同種と認められないとのこと。

「そんな物世界に存在しないよね？　なめてんのかな？
まぁ、持ってきた鞄がＣＯＭＰ（以降ＣＯＭＰ）に格納できるから、鞄に必要な物を入れておけばいいのかな」

悪魔召還とエネミーソナーは御馴染みだからスルーして、最後にアナライズを自分にかけておしまい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝アナライズ結果＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：御影　冬夜
＝　Ｌｖ：４
＝　種族：人間
＝　特殊技能：？？？
＝＝

五歳の頃から鍛え続けた十年分の成果だろうか、レベルが４だっ

た。
思ったより低かったが、これから異界で鍛えれば良いので問題なし。
問題は特殊技能が解析出来なかった事だが、性能を上げれば何れは解析できるだろう。

――――――祖父宅

気付けば祖父の家の前に着いていた。　手に入ったＣＯＭＰに熱中しすぎたようだ。
インターホンを鳴らすと家の中から慌ただしくしながら祖父が出てきた。
「冬夜か！？　おうおう、ずいぶん大きくなったのぅ」
僕の頭を撫でる人物は祖父だった。　祖父の名は沖田　宗一郎。
子供の頃に会った時はまだ黒髪であったが、今ではすっかり白髪に変わっている。
昔、道場を開いていたためか、未だに体はがっちりとしている。
これで御年六十五歳とは思えない。

「すまんのう。　これから町内会の寄合があっての、すぐに出かけねばならんのじゃ。
引越しの荷物は全て離れに置いてある、好きに使いなさい」
「迷惑をかけますが、お世話になります御祖父さん」
「うむ、つもる話は明日にして、今日はゆっくりと休みなさい。
それじゃ、冬夜また明日じゃ！」
元気よく飛び出して坂道を走って降りていく祖父に少し飽きれてしまった。
荷物を背負いなおして、僕は離れへと向かった。
「キッチンに風呂にトイレ完備で文句なしだね。
荷物を整理したらさっさと異界探して、悪魔退治にでもしゃれ込もう」
座卓にパソコンを設置し、服はクローゼットの中にしまう。
後は中学に入学したときに買ったイスノキで作成された木刀と食料を入れた鞄をＣＯＭＰにしまうだけ。
荷物の整理が終わったため、僕は玄関の鍵を閉めて異界を探すために歩き出す。
「さて、異界を見つけたら何を仲魔にしようかな……」
僕は顔を隠すためにフードをすっぽりとかぶる。
いきなり尾行されたりしないだろうけど、今後の事を考えると正体を分からないようにしないとね。
しばらく歩いて墓地を見つけたが、土地勘を養う為にもうしばら

く散歩しよう。
祖父宅から商店街と逆方向に来ると途中橋を渡った所に墓地があり、その先に明日から通う学園があるようだ。
学園の隣には旧校舎だろうか、立ち入り禁止となっている場所もあった。
僕は途中にあった墓地へ戻った。

――――――墓地

異界探知アプリを起動すると【ここ　異界　よかたね】と表示された。
異界と分かった所でＣＯＭＰから木刀を取り出し、散策を開始する。
そして、初めてであった悪魔は……人語を解さぬゾンビだった。
「アガガガガ？」
「ゾンビってさ、腐ってるよね？　腐ってなかったら知らないけど。
ま、頭と四股を木刀で殴ればすぐにばらばらになりそうな気がす

るな」

ゾンビはゆっくりとした速度で近づいてくる。　思ったとおり、動きは遅いらしい。

僕は木刀を構え、頭を目掛けて横に一閃……

『ゴギャッ』

変な音ともにゾンビの頭は吹き飛んでいった。

残った体は失った頭を探しているのか、頭のあった場所を手で探っている。

「人間ってさ、頭に脳があって体と切り離されると体は動かなくなるもんなんだ。

なぜかって脳から筋肉を動かす信号が送られなくなるからね……。

だけどゾンビは頭が無くても動いてる……不思議だね？」

もう認識できていないのか、僕に向かってこないゾンビ。

後は予定通りに作業を進める。　右腕、左腕、最後に胴と順に木刀を振るっていく。

胴と下半身が千切れたところでゾンビは蒸発するようにして消えていった。

「お、一体退治成功かな？　ＣＯＭＰのＭＡＧも１２に増えてるし、倒せたみたいだな。

さて、テンポを上げて悪魔退治しようか」

主に相手をするのはゾンビかスライム。　他の悪魔が見つからな

いせいもある。
ゾンビと同様にスライムも移動速度が遅いため、ひたすら木刀を叩きつける作業となっていた。

「ふむ……ガキか？」

悪魔に気づかれぬようにアナライズをかける。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝アナライズ結果＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：ガキ
＝　Ｌｖ：３
＝　種族：幽鬼
＝　能力：？？？？、？？？？
＝＝

「ビンゴ、交渉できるなら仲魔にしてみるか」

ガキが僕に気づくようにわざと足音を立てて歩く。
思惑通り、ガキは僕に気づいたようだった。

「人間でヤンスか！？」

「お、当たりかな。　言葉が分かるなら交渉できるよね？」

「はっ、オイラより低レベルな人間の話なんて……あれ、オイラより高レベルでヤンス？」

「それで、何か言う事は？」

「オイラは幽鬼のガキ、今後ともヨロシクでヤンス！」

他のガキとは毛色が違うのか、ゲームと違い思ったよりすんなりと仲魔にすることができた。

僕はＣＯＭＰからガキを召喚して、ＭＡＧの残量を確認する。

予想通り、召喚時にもＭＡＧを消費するらしく、５０→４５と減っていた。

「サマナー、オイラは何すればいいでヤンスか？」

「僕と一緒にゾンビとスライム退治でＭＡＧ稼ぎかな。

交渉できそうな悪魔がいれば、いったん交渉して駄目なら……殺す」

「了解でヤンス！」

ガキを仲魔にした後もやることに代わりは無い。

スライムとゾンビを主食としてのＭＡＧ稼ぎを再開した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝一日目結果＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝　名前：御影　冬夜

＝　Ｌｖ：４→６

＝　種族：人間

＝　特殊能力：？？？

＝　残ＭＡＧ：１２０

＝　道具格納：木刀×１、鞄×１

＝　鞄の中身：魔石×5、応急セット×1
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：ガキ
＝　Ｌｖ：3↓5
＝　種族：幽鬼
＝　特殊能力：毒ひっかき、スクカジャ
＝　ーーーーーーーーーーーー――能力説明―ーーーーーーー
ーーーーーーーーーー
＝　・毒ひっかき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）
＝　・スクカジャ：回避率、命中率を向上させる。（四回まで重ねがけ可能）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一日目（後書き）

いきなり修正、レイアウトが酷く崩れてました。
誤字修正1。

二日目？（前書き）

難しく考えたら負けで候。

二日目？

――――――夢？

「ベルベットルーム？」

「ええ、その通りでございます。　ここは夢と現実の狭間、ベルベットルーム。
そして私はベルベットルームの主イゴールと申します。
隣にいるのはエリザベスでございます。　どうぞお見知りおきを」

大きな窓に、壁や床一面を真っ青に染め上げた部屋。
気づけば僕はベルベットルームと呼ばれる部屋で椅子に座っていた。
イゴールと名乗る人間……ではなく悪魔だったか？

「それでは貴方のお名前をお聞かせ願えますかな？」

「名前は……御影　冬夜。　……僕からも聞かせて頂きたい」

引っ越して一日でＣＯＭＰを手にいれ、その日の夜にベルベットルーム。
この状況は出来すぎである。　そう思わずにいられない。

「ベルベットルームでご自身の名を言えるのは極わずかにございます。
ですが、貴方は名乗れた。　我らは貴方をお招き出来たことを光栄に思いましょう。

……して、聞きたい事とは何でございましょう？」

「僕をここに招き入れたのは誰かからの頼みですか？」

「はい、我らが主であるフィレモン様の命により、貴方をお招き致しました。」

フィレモン？　前向きな精神が人格化したものだったか？
なんにせよ胡散臭すぎる。　かと言って僕に害をなすわけでもないだろう。
しかし、何かと弄ばれているように感じるのはいただけないな。

「……今回はそういう事にして置きます。
それで、僕をここに招いた理由は？」

「こちらのカードと鍵をお持ち下さい」

「ブラクンカードが三枚？　鍵はまたここへ来る為のものかな？」

「聡いですな……ですが、それがいい。
ブランクカードはただ持っているだけで構いません」

ペルソナを貰えるのかと思っていた。　しかし、どうやら違うらしい。
手渡された三枚のブランクカードを順に見るが、どれも白いカードに見える……？
最後のカードだけが白ではなく、うっすらと何かが浮かび上がっていた。

「完全に描かれているわけでもなければ、完全な白でもない……？」

「覚醒の時が近いのでしょう。　それは必ず貴方のお役に立つでしょう。
我らはそれをほんの少し、お手伝いさせて頂くだけにございます」
「お手伝いね……今回はもう用は済んだみたいだし、お暇させてもらおうかな」
「またのお越しをお待ちしております」
椅子から立ち上がり、後ろの扉を潜ったところで僕は意識が途絶えた。
いや、覚醒したとでも言うべきか……

――――――翌日

「ふあぁ、ねむ……」
起きたところで一度背伸びをする。　これがたまらなく気持ちいい。
寝ている間にベルベットルームで貰った鍵を取り出し、ＣＯＭＰ

に括り付ける。
見た目は中世で使用されていた鍵に見える分、ストラップとして誤魔化せるだろう。
「夜は悪魔退治で、寝てる間はベルベットルームか……疲れが抜けないな」
しかし、どんなに疲れていても僕は朝六時に目覚める。
子供の頃から同じ時間に起きていたせいか、身体に染み付いているようだ。
「柔軟してシャワー浴びたらご飯でも作ろうか……」
朝はほぼ全自動で体が動く。　鍛錬等はせずに柔軟のみ行い、体調を整える。
少し汗をかいたらシャワーで流して制服に着替えて、ご飯を作る。
ご飯と言っても朝は米に味噌汁にお漬物、そしてＮＡＴＴＯＵである。
「日本人としてこれだけは譲れないねぇ」
『ピルルル』
「あれ？　ＣＯＭＰから？　番号を交換した覚えは無いけどな……」
ＣＯＭＰから呼び出し音が鳴り、液晶に表示された名前はガキだった。
「ガキ？　中に電話でもあるの？」

「お、繋がったでヤンス。　その通りでヤンス。
中の黒電話からはサマナーに直通で繋がるみたいでヤンスね」
「へぇ、これなら電話してるように見えるし、ＣＯＭＰから出さなくて良くなるね。
というか中に黒電話があるって、どんな構造しての？」
「ワンルームで、　テレビとソファと黒電話があるでヤンス。
テレビからは外が見れるでヤンス」
豪華……なんだろうか？
まだ仲魔がガキのみだから不明だが、仲魔が増えたら同じ場所に放り込まれるのか？
仲魔枠は全部で四枠、ワンルームに残り三匹の悪魔が入ったら狭そうだ。
「ガキ、そろそろ切るよ。　さすがにこれ以上話してると学校に遅れる」
「わかったでヤンス」
朝食を取り終わりＣＯＭＰをマナーモードに変更して外へ出る。
鍵を閉め忘れないよう気をつけつつ、僕は学園へ向かう。

――――――私立将門学園

将門学園は三階建ての校舎に体育館と何処にでもあるような構造をしている。
しかし、一点だけ違うところを挙げるとすれば講堂があることか。
三百人は入れるだろう大きな講堂、入学式はそこで行われた。

入学式も終わり、今現在僕は教室で待機している。
ホームルームをやったら解散とのことだったが、担任となる人がまだ来ない。
周りを横目で見ると、僕のほうをじっと見つめる視線があった。

視線の元は三人、全員がペルソナ使いと思われる。
ペルソナ使いになった訳ではないが、なんとなくペルソナを感じる事ができる。
相手も同じように僕をペルソナ使いだと思っているのだろうか……

『ガラッ』

「今日からお前達の担任になる神門（みかど）　鏡華（きょうか）だ。
二度は言わん、お前達の柔らかい脳みそに刻み込んでおけ」

いきなり教室は言ってきたかと思うと、捲くし立てるように自己紹介を始めていた。
女性でまだ若そうだが、年齢は二十台半ばか？

黒髪のロングに身長は百七十センチほどか、僕より高いのは間違いない。

「私に対する質問は許可せん、席順に自己紹介を始めろ。
私語をするようなら体罰も辞さないから覚えておけ」

一体どこから取り出したのか、神門先生の手には竹刀が握られていた。
まさか僕と同じようなＣＯＭＰを持っているわけじゃないだろうな？
それに、体罰も辞さないとは随分と強気だなぁ。

「暁（あかつき）　直江（なおえ）だ。　それ以上語る言葉は無い」

厨二病の言葉が思い浮かんだが、軽く頭を振って忘れることにした。
しかし、彼の持つ雰囲気が言動に対する違和感を感じさせないのは不思議だった。
堀の深い顔……渋い。　いい男なのだが、本当に十五歳なのかと疑いたくなる。

「十七番、何をぼーっとしている！　次はお前の番だ！」

どうでもいい考察をしている間に自分の番が来ていた。

「え、あ、すいません。　僕の名前は御影　冬夜です。
趣味は散歩に読書、パソコンです。　今後ともヨロシクお願いします」

無難に自己紹介を済ませると、後席の女の子がじっと僕を見てい

た。
しかし、すぐに女の子は立ち上がり……
「……神門　雪。　以上です」
暁と同じような短い自己紹介を済ませるだけだった。
神門？　苗字が神門先生と同じという事は姉妹か？
背が小さく、眼鏡をかけているためか図書委員を連想してしまう。
「自己紹介も終わったな、それでは明日以降の予定だが……。
明日は健康診断、明後日は体力測定、授業はその翌日からだ」
私立だからか？　随分とのんびりとした日程なんだな。
おかげで早く帰れるのだから嬉しい事だ。
「それでは解散する。　皆、くれぐれも遅刻しないようにな」
それだけ言うと、神門先生はさっさと教室を出て行ってしまった。
さて、僕も帰ろう。
「御影、一緒に帰ろうぜ～」
話しかけてきたのは……誰だっけ？
さっきの自己紹介をまじめに聞いてなかったせいで名前が分からない。
「えっと、ごめん名前なんだっけ？」
「えっ、ちょ、まじで！？　さっき自己紹介したばかりやん！
何？　もしかして、『自分以外興味ない』とかって言っちゃうタ

イプ？」

ああ、似非関西弁な上にめんどくさそうな奴だ

「ごめん、ちょっとボーっとしててあんまり聞いてなかったんだ。申し訳ないけど、もう一度名前教えてもらっていい？」

「仕方ないなー、俺っちの名前は天音（あまね）　恭二（きょうじ）や。天音じゃなくて、恭二でええでー」

「僕の名前は知ってると思うけど、御影　冬夜。僕も冬夜でいいよ。　じゃ、帰ろうか」

――――――帰り道

「ところで、冬夜って最近越してきたばかりか？」

「そうだけど、よく分かったね」

「そりゃなー。　御影って、この辺じゃ聞かない苗字だからなぁ。
ちなみに俺っちは生まれも育ちも神門市だぜ、この辺りも庭みたいなもんさー」

「じゃぁ、困ったことがあったら恭二に聞くことにするよ」

「そうしろそうしろ、何でも教えてやんぜー」

天音はどうやら隙間商店街にある肉屋の息子のようで、
学校が終わると店を手伝って小遣いを貰っているらしい。

しかし、貰った小遣いは大体一日で使い切ってしまうらしい。
その小遣いの使い道を聞いてみたところ。

「パソコンゲームが一本一万円て高うない？」

「ＳＦＣの全盛期に比べればましじゃない？」

「あれは子供の小遣いで買える物あらへんよ。
むしろ、子供に買わせようとしとらんわ」

他愛のない会話、実があるわけでもなしに続く。
中には探り合いも混ざってはいるが、所詮は子供だましである。

「ところでさ、冬夜は悪魔がいるって言ったら信じん？」

「悪魔？　なんでっさ？」

「いや、冬夜ならなんか信じくれそうだなぁと思ってん」

「僕のこと馬鹿にしてるって認識であってるかな？」
僕は少し不機嫌そうな雰囲気を出しつつ、違和感が出ないよう自然に振舞う。
教室にいたときに感じてた視線は暁、神門、恭二で間違ってなさそうだ。

「いやいやいや、すまんって。　馬鹿にしてるわけちゃうねん。
なんとなくな～？　冬夜からそないな雰囲気感じんねん」

「やっぱり馬鹿にしてる？　悪魔を信じる雰囲気ってどんな雰囲気さ？」

「いや～！　ちゃねん、ほんますまん！
俺っちも何言ってるかわからんようになってきた」

恭二がペルソナ使いと何となくわかるように、
恭二もまた僕がペルソナ使いだと思っているのだろう。
残念ながら僕はまだペルソナ使いではないが……。

「僕だったから良いけど、あまり他の人にそんな話しはしない方がいいよ？
あ、僕こっちの道だから」

「おうよ、ほんとすまんなぁ。
冬夜、また明日学校でなー！」

申し訳なさそうな顔をする恭二に、僕は笑顔で手を振る。
まだまだ甘いなと……心の中でも思いながら。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝二日目？＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝名前：御影　冬夜

＝Ｌｖ：６

＝種族：人間

＝特殊能力：【サマナー】【ペルソナ】

＝残ＭＡＧ：１０７

＝道具格納：木刀×１、鞄×１

＝鞄の中身：魔石×５、応急セット×１

＝ペルソナ：未覚醒カード×１、ブランクカード×２

＝ーーーーーーーーー能力説明ーーーーーー

ーーーーーーーー

＝【サマナー】：悪魔と交渉することが可能。

＝【ペルソナ】：ペルソナを召還可能。（未覚醒ため召還不可）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝名前：ガキ

＝Ｌｖ：５

＝種族：幽鬼

＝特殊能力：毒ひっかき、スクカジャ

＝ーーーーーーーーー能力説明ーーーーーー

ーーーーーーーー

＝・毒ひっかき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）

＝・スクカジャ：回避率、命中率を向上させる。（四回まで重ねがけ可能）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

二日目？（後書き）

誤字修正。タイトルちょっと修正。

二日目？（前書き）

二日目が終わらない。　楽しんで頂ければ幸いです。

二日目？

――――――祖父宅　母屋

「……話しは以上じゃ。　後は冬夜の好きなようにしなさい」

「はい、わかりました」

僕が作った昼ご飯を祖父と二人で食べつつ、話しを済ませる。
要は遺産を祖父が管理し、大人になったら使えるようにしてくれるとのことだった。
お金はあって困るものでもないが、現状大金が必要なわけでもない。

「それでは僕は少し散歩に行ってきます。
何かあれば携帯に連絡を貰えると助かります」

「うむ、最近は不審者が出没してるようじゃ。　気をつけてな」

僕は母屋を出て、その足で墓地にある異界へ向かう。
服や木刀等はＣＯＭＰに格納されているし、特に準備は不要だ。
橋に差し掛かったところで周囲を警戒するが、特に尾行されている様子もない。

墓地に着いたところで異界探知を使うが、結果は【異界　ちがう残念】とのこと。
どうやら異界は常に発生しているわけでもなさそうだ。

仕方なく、異界のありそうな旧校舎や、そのすぐ近くの山に向かう。

山というよりはアスレチックになっている公園のような場所である。

先に旧校舎へ入ろうとするが、門は固く閉ざされ立ち入り禁止の看板が立っている。

入ろうと思えば入れるが、無理をする事もない。　僕は山の方へ向かった。

「ビンゴかな」

異界探知の結果は【ここ　異界　ちとヤバイ？】と表示されている。

疑問系でヤバイと言われても正直どう返していいものやら不明だ。

先んじてガキを召喚しておこう……。

「今日は昨日と違って山の中だよ。

同じように仲魔に出来そうならする、出来ないなら殺す」

「了解でヤンス……ちょっと強い悪魔が多いでヤンス？」

エネミーソナーを確認すると赤く光っている。

周囲には既に悪魔が徘徊しているようだ。

「ん～、レベル４～１０程度ってところかな？」

「オイラとしては、もう少し昨日の墓地でレベル上げした方が良いと思うでヤンス。

死んだら元も子もないでヤンスよ？」

「最初は墓地予定だったんだけどねぇ、残念ながら異界が閉じちゃってて。
本当ならレベルの低い異界を探したいところだけど、、時間をかけたくないんだよ。
とりあえず、死にたくなければスクカジャ二回よろしく」

「え？　りょ、了解でヤンス！　『スクカジャ』『スクカジャ』」

ゲームなら強化系の魔法は戦闘に入ってからだが、ここはゲーム世界じゃない。
事前に使っておき、先手を取るべきである。
そして、悪魔が見えてきたところでアナライズをかける。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝アナライズ結果＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：エンジェル
＝　Ｌｖ：５
＝　種族：天使
＝　能力：？？？？、？？？？
＝＝

「相手は一体、エンジェルか……ガキ、木の陰に隠れてて。
交渉するから一人に見せかけたい。　まぁ、交渉決裂したら容赦なく殺すけどね」

小声で言うと、ガキは頷いて木の陰へと隠れた。
僕は、木刀を構えつつエンジェルを迎え撃つ。

「人間ですか？　人間がこんな場所で何をしているのです？
その様に武器を構えて、私と戦うつりもですか？」

「いや、君と交渉しようと思ってね
単刀直入に言うけど、僕の仲魔にならない？」

「そうですね……レベルは問題なし、魂も綺麗な色をしていますね。
良いでしょう、人の子を導くのも天使の役目、仲魔になりましょう。
私の名はエンジェル、今後ともヨロシクお願いしますよ」

トントン拍子に仲魔になったエンジェルを召喚する。
召喚した瞬間、微かに僕達へ向かってくる悪魔の気配を感じた。

「ガキ、スクカジャはどの程度持つ？
エンジェルは仲魔になったばかりであれだけど、連戦だ」

「後2～3分が良いところでヤンス」

「了解です」

呼吸を落ち着かせて耳を澄ます。　犬のような息遣いが微かに聞こえる。
数は……二匹…いや、三匹か、レベルは僕上のような気がする。

「数は三匹、ガキとエンジェルは投石で各自に向かうように誘導してくれ。
ガキは頑張れ、エンジェルはあまり接近戦が得意じゃないだろうから、
攻撃は控えて防御を優先して」

「投石！？　石、石はどこでヤンス！？」

「来ました……赤い毛に二又の尻尾、ガルムですね」

「アナライズしてる暇はない、奴等が飛び跳ねたらそこが狙い目だよ。　じゃ、散開！」

現れたのは三匹のガルム。　彼らも同じように散開し、各個へ向かって駆けてきた。

僕の方へ向かってくるガルムは飛び跳ねて襲い掛かってきた。

「真正面からとは能がないね！」

『ゴッ』という音と共に、ガルムの顔面に全力で振り抜いた木刀がめり込む。

地面に叩き付けられたガルムは力なく倒れ、そのまま消滅した。

ガルムのレベルはおそらく僕と同等以上、一撃で倒せたのは運がよかった。

「エンジェル、まだ生きてるかい？」

「はい、ですが早めに助けて頂けると助かります」

エンジェルは僕の指示通りに防戦一方の展開を繰り広げている。

防御優先とは言ったが、思った以上に接近戦は得意じゃなさそうだ。

「上手く合わせてよ？」

僕はガルムに向かって駆け出し、間合いに入ると同時に木刀で斬り上げる。

「甘イワ！」

攻撃と同時にエンジェルは下がっていたが、ガルムには避けられてしまった。

しかし、本番はここから。　むしろ狙い通りだった。

「佐々木小次郎の技を知ってるかい……？　『劣化燕返し！』」

瞬時に木刀を切り替えし、ガルムに向かって追撃をかける。

見舞った一撃は仕留めるまでに至らなかったが、一定のダメージは与えられた。

体勢を立て直したガルムだが、足がふらついてる。　僕は木刀を構え言葉を紡ぐ。

「服従か死か、好きな方を選びなよ」

「グルルゥ……ニンゲン如キガ、我ヲナメルナ！」

「愚かですね……」

頭に血が上っていたのか、ガルムは僕に向かって飛び掛ってきた。

避けるまでもなく、木刀を大上段に構え……渾身の力で打ち下ろす。

結果は言わずもがな、ガルムは起き上がることなく消滅した。

「イタタタ、手が痺れるな……早いけど木刀も限界かな、少しヒビ入ってるし。

だけど、今後の事を考えると刀か銃でも欲しいところだね」
「ディアを使いましょうか？　木刀に関してはなんともできませんが……」
「いや、ディアは不要だよ。　少し手が痺れただけだから」
僕は痺れた手を振りながら感覚が戻るのを待つ。
痺れが抜けた処で何度か手を握りなおし、治ったのを確認して木刀を持ち直す。
「サ、サマナー！　は、ははは、早く助けて欲しいでヤンスよー！
食われる、食われちゃう、食い殺されるでヤンスー！」
「まだ仲魔になって一刻も立っていませんが……ガキ、貴方は良い仲魔でした」
「エンジェル、テメー後で覚えておけででヤンスー！
オイラの恨みは」
「エンジェル、遊んでないで助けるよ」
「仕方ありませんが、承知しました」
ガキはガルムに体を押さえつけられ、顔を噛み付かれそうになっていた。
顔を左右に振ることで、ガキは必死に避けていた。
しかし、このままの状態を維持すれば噛み付かれるのも時間の問題だろう。

「んー、ちょっと試してみるか……」

ガルムが気づく前に僕は近づき、木刀ではなく自身の足で強引に蹴り上げる。

悲鳴と共にガルムは空中へ投げ出され、僕も合わせて空に飛び上がる。

頂点へ達し、逃げられない状態のガルムに僕は容赦なくかかと落としを打ち込んだ。

「ギャン！」

「思いのほか上手く出来たな。　ガキ、呆けてないでガルムの足を押さえて。

エンジェルも一応手伝って動けないよう拘束してね」

「りょ、了解でヤンス」

「承知しました」

ガキは助かった事が嬉しかったのか、自身の体を抱いていた。

二人係で拘束したガルムの顔に僕は足で踏み付ける。

「さて、服従か死か、好きな方を選びなよ。

死を選ぶのは良いけど、楽に死ねると思うなよ……」

正直なところ、仲魔にならず死を選んでくれて構わない。

自分自身がどこまで残酷になれるのか、最近は好奇心が抑えづらくなってきている。

一方、言葉に殺気を込めすぎた為か、ガルムだけでなく二人も体を震わせていた。

「ショ、承知シタ。　仲魔トナロウ。
我ハ妖獣ガルム、今後トモヨロシク」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝アナライズ結果＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：ガルム
＝　Ｌｖ：７
＝　種族：魔獣
＝　能力：毒かみつき、タルカジャ
＝　―――――――――――――｜｜能力説明｜―――――――
――――――――――
＝　・毒かみつき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）
＝　・タルカジャ：攻撃力をを向上させる。（四回まで重ねがけ可能）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ガルムのレベルを見て、僕自身のレベルを再確認するとレベル７に上がっていた。
先に倒した二匹のおかげで上がったのかもしれない。
契約上は問題ないが、仲魔にレベルを超されると困るので召喚は止めとこう。

「ガキの方は既にディアを使用しました。
それより主、ガルムを蹴った足の方は大丈夫ですか？」

「問題ないよ」

僕は軽く飛び跳ねて問題ないことを証明する。

そして木刀を軽く握りなおし、ＣＯＭＰをポケットに突っ込む。
「とりあえず仲魔が二人で合計３人になったし、仲魔集めは一旦止めるよ。
仲魔枠は残り一枠しか残ってないし、先にレベルを上げないと契約が面倒だしね」
「それがガルムを召喚しない理由なんですね」
「いれば頼りになりそうでヤンス。
だけど、いきなり契約が切れて襲われたら元も子もないでヤンス」
「１レベル差位なら急に契約が切れるって事はないだろうけどね。
だけど、万が一って事もあるから、用心するに越した事はないさ。
さて、話が長くなったけど、レベル上げの為に狩りを始めようか……」

ＣＯＭＰを貰ってから二日目、既に仲魔枠が四枠中三枠埋まっている。
枠を拡張したいが、僕は邪教の館の場所すら知らない。
所在を調べるべきなんだろうけど、正直探し出せるとはとても思えない。

今は今後やるべきことを考えても意味はない、先立ってはレベル上げかな……。
魔界に行く予定はないが、出来るだけレベルを上げておきたい。
狭い地域にペルソナ使いが三人いる事にも何かしら意味があるかもしれない。
「サマナー、置いてくでヤンスよ～？」

「何を言ってるのです。　行くなら一人で行きなさい、私は主と共にあります」

「ああ、今行くよ」

僕はフードを深くかぶり直し、木刀を片手にゆっくりと歩き出す。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝二日目？＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝名前：御影　冬夜

＝Ｌｖ：７

＝種族：人間

＝特殊能力：【サマナー】【ペルソナ】

＝残ＭＡＧ：９８

＝道具格納：木刀（ヒビ有り）×１、鞄×１

＝鞄の中身：魔石×５、応急セット×１

＝ペルソナ：未覚醒カード×１、ブランクカード×２

＝ーーーーーーーーーーーー能力説明ーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

＝【サマナー】：悪魔と交渉することが可能。

＝【ペルソナ】：ペルソナを召還可能。（未覚醒ため召還不可）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝名前：ガキ

＝Ｌｖ：６

＝種族：幽鬼

＝特殊能力：毒ひっかき、スクカジャ

＝ーーーーーーーーーーーー能力説明ーーーーーーー

ーーーーーーーーーー
＝・毒ひっかき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）
＝・スクカジャ：回避率、命中率を向上させる。（四回まで重ねがけ可能）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝名前：エンジェル
＝Ｌｖ：６
＝種族：天使
＝能力：ディア、ハマ
＝ーーーーーーーーーーーーーー―能力説明―ーーーーーーー
ーーーーーーーーーー
＝・ディア：単体に小回復させる。
＝・ハマ：敵単体に即死効果（一定の確率）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝名前：ガルム
＝Ｌｖ：７
＝種族：魔獣
＝能力：毒かみつき、タルカジャ
＝ーーーーーーーーーーーーーー―能力説明―ーーーーーーー
ーーーーーーーーーー
＝・毒かみつき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）
＝・タルカジャ：攻撃力をを向上させる。（四回まで重ねがけ可能）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

二日目？（後書き）

誤字脱字多くてごめんさい。

二日目？（前書き）

土曜投下予定だったけど、早く二日目終わらせたかった。
深く考えずにお読み下さい。

二日目？

――――――三時間後

「ふぅ……皆少し休憩しよう」

「サマナ～、また休憩でヤンスか？」

「愚か者とは思っていましたが、ここまでとは思っていませんでした。

主は常に警戒を怠らず、我々が有利に戦えるように指示していたのですよ？

おかげで我々は常に先手を取って、傷つく事なく相手を倒してきたのです」

「そ、それぐらい知ってたでヤンス！」

「知ッテイタナラ、先程ノヨウナ言葉ハ出テコナイダロウ」

二人の言葉にガキも初めは反論していたが、途中から正座させられていた。

仲が良いのかと問われれば、さすがの僕も首を捻らざる得ない。

しかし、三時間のうち一時間以上は休憩を取っている。

自分達と同等かそれ以上の悪魔を狙って倒し続けたおかげでレベルは上がった。

自分のレベルが１０を超えた事に多少の違和感を覚えたが気にし

てる暇はなかった。
悪魔は居場所をすぐに変える為、戦闘中であっても周囲の警戒を解く事が出来ない。
常に警戒し続けているせいか、昨日と違って疲労度の具合が違う。
今後の事を考えると慣れていかなければいけないだろう……頑張るしかない。

「君がスティーヴンからＣＯＭＰを貰った少年か？」

突如、言葉と共に現れたのは海軍帽をかぶり赤いマントを羽織った美白の男。
その隣にはメイド姿の格好をして、同じように美白の少女が立っていた。
仲魔はまだ気づいていないようだが、僕自身が声をかけられるまで気づけなかった。

やはり疲れがピークに近づいてきているのだろうか、そろそろ引き返すべきか。
だが、今は考えている場合でもない、質問に答えなければ……。
言葉から察するに、スティーブンとは友人関係なのか？

それに、スティーブンとは昨日会った車椅子のおっさんの事だろう。
だが、僕は名前を聞いていない。　そのため、僕が答える内容は決まっていた。

「スティーヴンって人は知りませんが、昨日車椅子の人からＣＯＭＰは貰いましたね」

「あの馬鹿が……せめて名乗る程度の事はすべきであろうに……。
しかし、自分で言っておいて忘れたでは話にならん。
名乗らせてもらおう、我が名はヴィクトル。　悪魔合体師を生業とする者だ」

やっぱり感が否めないところではあるが、今回は儲けものだと信じよう。
こちらも名乗り返すべきだろうけど、普通に返しては面白くない。
ヴィクトルと言えばあの組織の人物にも関わっていた事があるはずだ。

「僕の名は葛葉ライドウ。　高校生兼サマナーをやってます」

「はっはっは、嘘つくならもっとましな嘘をつけ。　葛葉一族は既に滅んでいる。
時期が、いや時代が悪かったな……滅んだのはほんの十年前の事ではあるがな」

どこか寂しそうな表情を見せるヴィクトル。
葛葉の情報を得ようと思った結果が、滅んでいたではどうしようもない。

「……そっか、葛葉は滅んでたんですね」

「計画的だったんだろうな。　葛葉が滅ぶ日までの約三十年は平和だった。
平和は葛葉一族が怪異に介入する事を減らし、葛葉ライドウも弱体化していった。
メシアとガイアはその間に力を蓄え、十年前に事を起こした。
その結果が葛葉一族の滅びだった。　そして、最後の代は二十六

代目ライドウだ」

「それ以降は怪異、悪魔が関わる事件が増えていったと言う事ですか……。

ですが、滅んだのであれば僕が勝手にライドウを名乗っても問題ないと。

二十七代目ライドウと勝手に名乗らせてもらうとします」

しかし、悪魔関係の事件が多くなったのは葛葉一族の滅亡が原因か……。

メシアもガイアも一般人は死ねば良いとでも思っているのだろうな。

「細かい話は我が業魔殿にて話そう。　あまり異界に居続けるのは問題が起きやすい。

メアリ、ターミナルの準備を…「ブモォォォ！！！」…早速、問題が起きたようだ」

木の陰から出てきたのは牛の頭に足を持ち、手には斧を持ったミノタウロスだった。

仲魔もミノタウロスの雄たけびに気づいたようで、僕の元へ集まってきた。

「主、敵です。　それと、そちらの方は？」

「細かい話は後、まずはあれを潰そう。

ヴィクトルさんは、一緒に戦いますか？」

「しばらくは観戦させて貰うとしよう。　君の実力を知るいい機会でもあるからな。

倒せないとわかった時点でメアリに介入させる。　では、頑張りたまえ」
「了解です。　ガキ、魔力が残ってればスクカジャ四回。
ガルムはタルカジャ四回かけて。　エンジェルは後方で回復をよろしく」
「サマナー、スクカジャは二回が限界でヤンス！　『スクカジャ』×2」
「主殿、我モタルカジャハ三回ガ限度ダ。　『タルカジャ』×3」
二人が補助魔法を使っている間にミノタウロスのアナライズを済ませる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝アナライズ結果＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：ミノタウロス
＝　Ｌｖ：１５
＝　種族：邪鬼
＝　能力：？？？、？？？
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あれま、随分とレベルが高いな……。
ガルムは左、ガキは右で僕は正面から行こう」
「あいさー！　一番ガキ、『毒ひっかき』でヤンスー！」
「我モ遊ンデハイラレヌナ、我ガ牙ヲ味ワエ！　『毒かみつき』」

左右からの攻撃にミノタウロスは的を絞れずにいるようだ。
しかし、二人の攻撃であまり傷ついている様子がない。　物理耐性持ちか？
僕も木刀で何度か斬りかかるが、木刀なんぞで斬れるわけもなく傷がつかない。

「ブモォォォ！！！」

突然の雄たけび、同時に片手で持っていた斧を両手で持ち勢いよく振り上げる。
僕はチャンスとばかりに斧を振り上げるタイミングに合わせ飛び跳ねる。
狙いは脳天、僕は渾身の力を振り絞り木刀を叩き付ける。

しかし、頭が固すぎたのか『バキッ』という音と共に木刀が折れてしまった。
当のミノタウロスは揺らぐ事無く、むしろ口元を吊り上げ笑っている。
一瞬の油断、その隙にミノタウロスは振り上げた斧を僕目掛け振り下ろしてきた。

「しまっ……「ブモォォォ！！！」」

「主、避けてください！！」

「主殿ヲ殺ラセハセンゾ！」

ガルムの攻撃も、ガキの攻撃も間に合わない。　自力で何とかするしかない。

僕は全力でミノタウロスの体を蹴りつける。　倒すためではなく、逃げるために。

「ふぅぅぅ、さすがに死ぬかと思ったよ。　痛ぅ……完全には避けきれなかったか。
ま、薄皮一枚ですんだのは僥倖と思っておこう」

ミノタウロスの両腕から振り下ろされた斧の刃には命中することはなかった。
しかし、風圧だけで服はおろか肉体までをも切られていた。
それに薄皮一枚とはいえ、多少出血が激しい。

「主、治します。　『ディア』……これで大丈夫でしょう。
しかし、気をつけてください。　失った血はさすがに戻りませんので……」

「ありがとう。　だけど如何したものか……恐らく物理耐性持ち、素手じゃ無理か。
補助が切れたらあっという間に戦況が傾きそうだな……」

「主、ひとつ試したいことがあります。　許可して頂けますか？」

「……許可する。　試せるものは全部ためそう」

「では行きます……不浄なる者よ、その命、神へと返しなさい『ハマ』」

エンジェルの唱えた『ハマ』がミノタウロスの全身を光で包み込んだ。
ガキとガルムの二人はミノタウロスが光に包まれる寸前に離れて

いた。

「ブルァァァァ！！！」

光に包まれたミノタウロスから悲鳴の様な雄たけびが上がった。
それと共に巨大な物が地面に落ちたような音が響いた。
光が晴れると、ミノタウロスは地面に横たわっていたが、次第に消滅していった。

「エンジェル、グッジョブでヤンスよ！」

「我ラノ中デ唯一ノ魔法攻撃ガ『ハマ』ト言ウノモ情ケナイ話ダ」

「ありがとうエンジェル。　ガルムの言う通り他の攻撃魔法も欲しいところだね。
その為にもヴィクトルさんに悪魔合体して貰わないとね」

僕は折れた木刀を拾い上げ、鞄に放り込んでからＣＯＭＰに収納する。

「戦い方は危うかったが、なかなか楽しませて貰った。
それに先程の悪魔は異界の中核を担っていたようだ。既に異界が収束を始めている。
巻き込まれる前に戻るとしよう、メアリ、ターミナルを起動しろ」

「はい、ヴィクトル様」

ターミナルが起動したのか、僕は視界が歪んだように見えた。
そして、歪みが無くなると僕は見知らぬ場所に立っていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝現時点のレベル＝＝＝＝＝＝

＝　冬夜：Ｌｖ７↓１２

＝　ガキ：Ｌｖ６↓９

＝　エンジェル：Ｌｖ６↓９

＝　ガルム：Ｌｖ７↓１０

＝　空き：Ｌｖ？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

――――――業魔殿

「ふむ、無事に着いたようだな。　形式的ではあるが、やっておくとしよう……。

ようこそ、我が業魔殿へ。　私はここの主、ヴィクトルだ。

ここでは悪魔同士を合体し、新たな悪魔を生み出している」

「私はヴィクトル様に使えるメアリと申します」

ヴィクトルの背後には見慣れない機械が大量に配置されている。

不気味な雰囲気を出している部屋だが、薄暗さが更に不気味さを際立たせている。

「なるほど、我々もついに悪魔合体をするわけですね。
出来れば主の役に立てるように合体していただけると幸いです」
「さすがのオイラもガキのままじゃ辛いでヤンス」
「我ハ主殿ノ為ニナルナラ、誰ト合体シヨウトモ構ワナイ」
三人とも合体を望んでいるようだが、できれば戦力低下は避けたい。
それなら合体要員の仲魔を探すしかないか……。
「悩んでいる内容について察しがつく、我が出来る事は悪魔合体だけではない。
悪魔全書から魔貨に応じた悪魔を呼び出すことが可能だ。
ただし、悪魔全書から召喚した悪魔は意識がない。　よって合体用にしか使えん。
悪魔を召喚すると言うよりは、魔貨を使って悪魔を模るだけだがな」
「合体要員を探さずに済むのはありがたいですね。
そうだ、ＣＯＭＰの拡張やアプリ更新に関してスティーヴンから聞いてませんか？」
「ＣＯＭＰの拡張は我が輩が受け持とう。
アプリの更新については、そこにあるターミナルに端末を繋げれば良い。
拡張やアプリ更新は金がかかる、アプリについては我が金を預かることになる」

「わかりました。　訊ねてばかりで申し訳ないんですが、武器屋って知ってますか？
できれば防具、道具屋も合わせて教えてもらえると助かります」
「商店街の角にある雑貨屋の発天堂（ハッテンドウ）に行け。
我が輩の名を出せば武具、道具のどれでも売ってくれるだろう」
武具、道具の全てを担ってるのだろうか……よくやるもんだ。
時間的に今日はもう難しそうだし、明日健康診断終わったら行くとしよう。
「少年よ、今の我が輩は気分が良い。
他に何か聞きたい事があれば聞くがよい」
「いえ、今は特にありません。　それよりも悪魔合体をお願いします。
悪魔全書からザントマンを召喚して、エンジェルと合体。
その後はエンジェルを召喚して、ガキと合体。
最後にグレムリンを召喚して、ガルムと合体をお願いします」
「三千魔貨必要だ……と言いたいが今回は特別だ。　無料で召喚してやろう」
エンジェルと悪魔全書から召喚されたザントマンはカプセルの様な物に入れられた。
真剣な顔付きで機械を操るヴィクトルさん。　無事成功してくれるとありがたい。
大きな光を放った後、目の前に女性が佇んでいた。
「エンジェルを改め、女神ハトホルです。

主、改めて今後ともヨロシクお願いします」

「ああ、よろしく。　君の意識が残ってくれて助かるよ」

次はガキと召喚したエンジェルの合体。

「来たでヤンスー！　ガキ改めイッポンダタラでヤンス。
サマナー、今後ともヨロシクでヤンス！」

「次はガルムの番だね」

「無視でヤンスか！？」

ガルムと召喚したグレムリンの合体。

「ブルルゥ。　ガルム改め、我が名は魔獣バイコーン。
主殿、今後ともヨロシクお願いする」

「うん、よろしく。　予想通りの合体ができて良かったよ。
バイコーンだけが心配だったんだ。　合体事故もなかったし、ほんと良かったよ」

三人をＣＯＭＰに戻し、次の作業のためにヴィクトルへ向き直る。
ヴィクトルは合体時と同じ真剣な目つきで僕を見ていた。

「少年、いや冬夜よ、君は合体の結果を知っていたのか？」

「僕の名前、知ってたんですね。　まぁ、それは置いといて。
合体の結果はある程度知ってました。　ですが理由はお教えできません。

それは僕の根幹に関わることでなので、仲魔であろうと教えるつもりはありません」

「ふむ、並々ならぬ決意があると見える。　聞きたいとは思うが、止しておこう。
それで、他に用はあるかね？」

「仲魔の枠を増やしたいんですけど、できますか？
後は悪魔分析（アナライズ）アプリと道具格納（アイテムストア）アプリの更新を」

「全部で二万五千円、それか五千魔貨だな。　支払い方法はどうする？」

「現金で二万五千払います。　ではお願いします」

「しばらく待っていなさい」

僕はミノタウロスに斬られた服をＣＯＭＰにしまい、新しい服を取り出す。
さすがに斬られた服を着たまま帰るのは問題だろうと思い、新しい服に着替えた。
着替えてから小一時間経った頃だろうか、ヴィクトルさんが戻ってきた。

「スティーヴンめ、厄介な物を作ってくれた。
冬夜よ、増やせたのは二枠だ。　併せてアプリの方も更新しておいた」

「ありがとうございます。　今日はもう帰らせて頂きますね」

「うむ、悪魔合体が必要になったらまた来るが良い。
ＣＯＭＰの改良、アプリの更新の場合もな……メアリ、出口まで案内してやれ」

メアリさんに案内され、細い螺旋階段を上がりきるとそこはホテルの一室だった。
案内されるままに部屋を出てメアリさんの後を追うと、玄関口までたどり着いた。

「ヴィクトル様に御用がありましたら、次回以降は私を通してください」

「わかりました。　ではまた……」

僕は疲れた体を引きずるようにして帰路についた。

【ＮＥＷ：仲魔枠が四枠→六枠に拡張されました】
【ＮＥＷ：道具格納枠が三個→六個に拡張されました】
【ＮＥＷ：悪魔分析アプリが更新され、属性耐性が分析できるようになりました】

＝＝二日目？＝＝

＝　名前：御影　冬夜
＝　Ｌｖ：１２
＝　種族：人間
＝　残ＭＡＧ：３７９
＝　魔貨：２４２９
＝　日本円：六万四千円　→　三万九千円
＝　道具格納：折れた木刀×１、鞄×１

＝鞄の中身：魔石×２５、ディスポイズン×３、洋服×２、斬られた洋服×１
＝ペルソナ：未覚醒カード×１、ブランクカード×２
＝ーーーーーーーーー特殊能力説明ーーーーーーーー
ーーーーーーー
＝【サマナー】：悪魔と交渉することが可能。
＝【ペルソナ】：ペルソナを召還可能。（未覚醒ため召還不可）
＝【剣術】：剣を利用した技を使うことが可能。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

＝名前：ガキ↓イッポンダタラ
＝Ｌｖ：９↓１０
＝種族：幽鬼↓邪鬼
＝ーーーーーーーーー特殊能力説明ーーーーーーーー
ーーーーーーー
＝・毒ひっかき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）
＝・爆砕拳：敵単体に物理属性の中ダメージ
＝・チャージ：一定時間力を溜め、物理ダメージを二倍以上にする
＝・スクカジャ：回避率、命中率を向上させる。（四回まで重ねがけ可能）
＝・ディア：味方単体を小回復させる。
＝・ハマ：敵単体に即死効果（一定の確率）
＝ーーーーーーーーーーー属性耐性ーーーーー
ーーーーーーー
＝【氷結耐性】【電撃耐性】【疾風弱点】【破魔弱点】
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

＝名前：エンジェル↓ハトホル
＝Ｌｖ：９↓１１

＝　種族：天使↓女神
＝ーーーーーーーーーーーー特殊能力説明ーーーーーーーー
ーーーーーーーーー
＝　・ディア　　：味方単体を小回復させる。
＝　・メディア　：味方全体を小回復させる。
＝　・ハマ　　　：敵単体に即死効果（一定の確率）
＝　・ジオ　　　：敵単体に電撃属性の小ダメージ＋感電（一定
の確率）
＝　・ドルミナー：敵単体に睡眠効果（一定の確率）
＝　・マハガル　：敵全体に疾風属性の小ダメージ
＝ーーーーーーーーーーーー｜｜｜属性耐性｜｜ーーーーー
ーーーーーーーーーー
＝　【物理弱点】【銃弱点】
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：ガルム↓バイコーン
＝　Ｌｖ：１０↓１２
＝　種族：魔獣↓魔獣
＝ーーーーーーーーーーーー特殊能力説明ーーーーーーーー
ーーーーーーーーー
＝　・毒かみつき：敵単体小ダメージ＋毒（一定の確率）
＝　・タルカジャ：攻撃力をを向上させる。（四回まで重ねがけ
可能）
＝　・ラクカジャ：防御力をを向上させる。（四回まで重ねがけ
可能）
＝　・スクカジャ：回避率、命中率をを向上させる。（四回まで
重ねがけ可能）
＝　・マハラギ：敵全体に火炎属性の小ダメージ
＝　・マハブフ：敵全体に氷結属性の小ダメージ
＝　・地獄突き：敵単体に銃属性の中ダメージ

＝ーーーーーーーーーーーーー―――属性耐性――ーーーーー
ーーーーーーーーーーー
＝【電撃弱点】【呪殺無効】
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

二日目？（後書き）

雑貨屋の名前書き忘れたので修正。

三日目（前書き）

少しホモっぽい描写あり？
苦手な方はブラウザの戻るボタン推奨。

三日目

――――――雑貨屋　発天堂

学校帰りに、僕はヴィクトルさんに教えて貰った発天堂へと来ていた。

「いらっしゃい、うちに何か用かい？
よく見ると初めてのお客さんだな、俺は発天堂の店主阿部　高和だ」

「阿部……高和……？」

僕の目の前に現れた店主は黒髪のオールバックになぜか青いツナギを来た人だった。
阿部高和……否、阿部さんと言えば有名なガチ■モだったような……

「ほう、お前さん俺の事を知っていて此処に来たようだな。
どうだ、一発や「ヴィクトルさんの紹介できました」……何だと？」

「僕の名前は御影　冬夜です。　ヴィクトルさんに紹介されてここに来ました」

「ヴィクトルの紹介だと！？　くそっ、こんな美味しそうな少年だ

というのに……。
仕方ないが、商売の方はしっかりやってやろうじゃない。　冬夜、ついて来な」
危なかった、やはり本物だったようだ。
ヴィクトルさんには感謝してしきれない、後でお礼を言いに行こう。
「ところで、店番の人いなくて大丈夫なんですか？」
「ああ、俺の恋人の道下が代わりにやってくれるさ。
道下も裏の商売の方を知ってるからな、特に気にしなくていいぞ」
道下さんもいるんですね……正直早く逃げ出したい。
逃げたら商品を買えないので、仕方なく阿部さんの後を追い地下室に降りて行く。
地下には適当に纏められた刀や剣が置いてあり、壁には銃がかけられていた。
「よかったのかホイホイついてきて、俺はノン「武器を見せてください」……チッ。
ほら、これがリストだ。　ちなみに支払いはニコニコ現金払いのみだ」
「ベレッタ９２Ｆが三万円で無銘の刀が三万五千円？　なんで刀の方が高いんだ……。
あれ？　メギド…ファイア…？　なんでこんな物まで扱ってるんですか？」
「ああ、それは仕入れの時に偶然紛れ込んだみたいでな。

仕入れ元から特に連絡も来ないから、取り合えず売ることにした。
ちなみに二挺しかないんだが、二挺で一つの組み合わせらしくてな。
多少高くなるが、買う場合は二挺分の金を出して貰うぞ」

「二挺で三千万、魔貨だと六十万ですか？　これ誰が買うんですか？」

「誰も買わんさ、商売を続けて十年経つが未だに買う客は現れん。
そもそもウチに来るいい男が少なくてな、お前さんが半年振りの客だよ。
それに裏の商売は気まぐれでやってるモノでな、売れるのは何時でもいいのさ」

普通逆だろう、表が気まぐれか隠れ蓑で裏が本業じゃないのか。
しかし、メギドファイアは欲しいが高校生の僕に三千万円は大金過ぎる。
遺産を使う以外に何か稼ぐ方法を探さないとだめか、悪魔関係の仕事あるかな……。

「とりあえず、無銘の刀をお願いします」

「三万五千円だ」

財布から諭吉三人と一葉さんを一人取り出し、阿部さんに手渡す。
銃が買えなかったのは残念だが、取り合えず刀が手に入った事を素直に喜ぼう。

「毎度、ご贔屓に……ってな。　ところで道具や防具は買わなくて良いのかい？」

「昨日ミノタウロスと戦った限り、防具はあっても死ぬとわかったんでいりません。
道具はお金が入ってから買いたいと思います。　今少し厳しいので……。
それより聞きたいんですけど、悪魔関係の仕事を斡旋している場所知りませんか？
さすがに学生の身でバイトしてもメギドファイアとか買える気がしないので……」

「はっはっは、確かに学生が三千万を簡単に稼げる訳がないな。
だが、俺もそんな場所は知らん。　組織にでも入らない限り無理じゃないのか？
とは言え、ここら辺にある組織は神門一門に限られるがな……。
一応、紹介ならできるがどうする？」

「神門一門ですか……」

恐らく神門鏡華先生や神門雪さんが神門一門に属しているのだろう。
せめてペルソナが覚醒するまで関わりたくないな……。

「今回は遠慮しておきます。　異界探しもしなきゃいけないので今日は帰りますね」

「また来い、いい男は何時でも歓迎する」

ＣＯＭＰに刀をしまい、来た道を戻って店内に出る。
道下さんにもお礼の挨拶を言って、僕は逃げ出すように業魔殿へ向かった。

「正直、二度と行きたくないけど、発天堂でしか買えないからなぁ……。
ま、それ以前にお金もないし稼ぐ当てもない、魔貨でも稼ぐ……？」

『ヴー、ヴー』

振動するＣＯＭＰが僕の足を伝わり何かが来たことを知らせる。
開いてみるとスティーヴンから僕宛にメールが来ていた。

『冬夜君、メールですまないが君に頼みがある。
今から業魔殿にあるターミナルへ向かってくれ』

――――――業魔殿

業魔殿についたところで、メアリさんにヴィクトルさんの面会を頼む。
面会の許可が下り、ヴィクトルさんにメールの内容を伝える。

「良いだろう。　もとよりターミナルは我が輩のものではない。
先日スティーヴンが設置していった物だ。　好きに使うが良い」

「ありがとうございます。　早速使わせてもらいますね」

僕はターミナルの前に立ち、ＣＯＭＰを開いてメールの続きを見る。

『ターミナルの前に着いたら、この文の下に書かれている座標を入力してくれ。
Ｎ３００．４００　Ｅ２００．７００
入力が終わったら、後はエンターを押すだけだ』

取り合えず、入力を済ませ後はエンターを押すだけの状態だ。

「エンターを押してっと」

なぜか僕は何の疑問も持たずにメールの内容どおりに動いていた。
エンターを押したときに違和感に気づいたが、既に時遅し……

『そうすれば先日私が買った山の屋敷前に転送される』

「山？　屋敷前？　転送！？　ちっ、魅了系の魔法か！？」

『せっかく山を含めて買った屋敷が異界化していたんだ。
冬夜君なら異界を閉じれると信じているよ！』

「我が輩もたまにやられるよ。　冬夜、頑張ってきたまえ」

最後に聞こえたヴィクトルさんの声だが、どうやら経験があったようだ。

――――――どこかの山中、屋敷前

「ここは……何処でも良いか……」

転送された場所は見知らぬ山の上だが、それほど高くない小山だった。

なにしろ眼下には町並みが見える。　立地としてはそれなりに良い場所のようだ。

振り返ればスティーヴンの言っていた屋敷が見える。

「随分最近に建てられた印象を受けるけど、それほど広くはなさそうだな。

今回は異界を探す手間が省けたと思うか……。　ま、さっさと異界を閉じて帰ろう」

屋敷の中に入り異界だとわかった時点で仲魔を召喚する。

さらにＣＯＭＰから刀を取り出す。

「さて、合体して強くなった君たちの力、見せて貰うよ」

「任せるでヤンス。　オイラ一人だけでも楽勝でヤンスよ」

「面倒な事に巻き込まれたようですね。

しかし、主は私とバイコーンでお守り致します。　ご安心を……」

「オイラは無視でヤンスか！？」

「主殿、人ノ気配ダガ……何カオカシイ」

バイコーンが感じた人の気配、異界化しているせいか上手く知覚出来ない。

近くにいるのかと思えば、遠くにいるようにも感じてしまう。

それに人だけでなく悪魔も同様に感じる。

「厄介だね。　エネミーソナーも赤くなったり青くなったり忙しそうだよ。

とりあえず、ガキ……じゃなくてイッポンダタラはスクカジャ二回。

バイコーンはタルカジャ二回よろしく。　すぐに会敵しても対応できるようにね」

「合体してもやる事が変わらない現実でヤンス。　『スクカジャ』×2」

「世ノ中ソンナモノダ。　『タルカジャ』×2」

「異界の基点になってる悪魔か、それに類似する物を見つけるよ。

とりあえずは、虱潰しに歩くか……」

外から見れば屋敷の幅は三十メートル程しかないはずだが、内部では違っていた。

探索を始め、端から端まで歩くのにおよそ一時間かかった。

途中で何度も悪魔と戦う事になったが、負けることは無かった。

魔力の消費を抑えるために、途中から補助は使っていない。

レベルが上がったこともあって補助なしでもあまり苦になっていないからだ。

「もひとつ『爆砕拳』でヤンス～」

「我ハ『地獄突キ』ダ！」

「皆のレベルが上がって重畳だね……。　さて、二階に移動しようか。
外から見たときは一階建てだったけど、異界化のせいで空間が広がってるのかな」

二階に上がってもやる事は変わらない。　一部屋ずつ調べ、対象を探す。
レベルの低い悪魔が居れば交渉し、レベルが高ければ無言で殺す。
何度か悪魔に交渉を試みたが、如何せん上手くいかず未だに仲魔が増えない。

「交渉って難しいね」

「主、そろそろ『服従か死か』は止めませんか？
さすがにレベル差がある悪魔でも断る者が多いかと思います」

「サマナーの交渉術にはさすがのオイラもドン引きでヤンスよ」

「ウブは言葉が通じないし、ジャックフロストは嫌いなんだよね。
もう少し他の悪魔がいたら良かったんだけど……ジャックフロストが多すぎる」

実のところ、屋敷に入ってから出てくるのはウブかジャックフロストばかり。
ウブは仕方ないにしてもハックフロストは認めん。

「主殿、中デ人ガ戦ッテイルヨウダ……」

目の前の扉の先から戦っているような音が響いている。

「ジャックフロストが多かったし、キングフロストかな……？
イッポンダタラはスクカジャ、バイコーンはタルカジャ、四回よろしく。
中に入ったらイッポンダタラはチャージして爆砕拳。
バイコーンはマハラギ、ハトホルは回復に専念。　さぁ、開けるよ？」

「『スクカジャ』×４に『チャージ』でヤンス！」

「マハラギ承知シタ。　『タルカジャ』×４」

準備が整ったところで扉を蹴破り、部屋に突入する。
中にいたのは黒い剣を持ったシスターと、真っ白い何かで覆われた悪魔だった。
ほんの一瞬の出来事だが、僕はシスターの背後にいたペルソナに目を奪われた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝アナライズ結果＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：ウェンディゴ
＝　Ｌｖ：２３
＝　種族：邪鬼
＝　――――――――――特殊能力説明――――――――――
＝　・ブフーラ：敵単体に氷結属性の中ダメージ
＝　・狂気の暴虐：敵全体をランダムに小ダメージ＋恐怖（一定の確率）
＝　――――――――――――――――――――属性耐性――――――――――
＝　【火炎弱点】【氷結無効】【電撃弱点】【疾風耐性】

＝＝＝

≪我は汝…汝は我…我は汝の心の海より出でし者…モムノフ。
汝が勝ち戦の、猛き先駈けとならん！≫

「な！　君はペルソナ使いでもあるのか！？」

「モムノフ、『チャージ』後に『渾身脳天割り』」

「……御意」

驚いているシスターを無視して、モムノフに指示を出す。
モムノフが両手で持った厚みのある刀……恐らく同田貫だろう。
それを大きく振り上げ、一足飛びにウェンディゴに接近し……頭上に振り下ろす。

悲鳴を上げる暇すらなく、ウェンディゴは真っ二つに切り裂かれていた。
そして誰も声を上げず、静寂に包まれた部屋でモムノフは僕の中へと消えていった。

「さて、異界の収縮も始まったし帰るよ……バイコーン以外は戻れ。
貴方も話したいことはあるだろうけど、外に出てからにしてもらえるかな」

「良いでしょう」

僕はバイコーンに跨り、部屋を出て廊下を駆け抜ける。
シスターは何を考えているのか、窓を打ち破って二階から飛び降りて行った。

「やっぱりバイコーンは、シスターがメシア教だと思う？」
「ブルゥ、恐ラクハ……」
「まったく何でこんな所に居るんだか……面倒だね」
屋敷の外へ出ると、シスターは剣を構えて待っていた。
僕はＣＯＭＰを隠したままバイコーンを戻し、刀を肩に担ぐ。
「サマナーな上にペルソナ使いである人物は見たことがありません。
君は一体何者です？」
「二十七代目葛葉ライドウ」
顔はフードで隠したまま、僕は短く言いきる。
僕の言葉に、シスターは戸惑いの表情を浮かべていた。
「これ以上は必要ないだろう？　行かせてもらうよ」
「……待ちなさい！」
振り向けば、シスターは何か覚悟を決めたような面持ちをしていた。
「名乗らせるだけと言うのは不公平でしょう。　覚えておきなさい、私の名はトリア。
君がメシア教に入らねば、いずれ敵となる者です……」
「……さよなら」

正直な話、名前を覚える気もなければ、メシア教もどうでも良い。
それより肝心なことがある……どうやって帰れば良いのか？
帰り方がメールに書かれていなかった為、とりあえず歩き続けるしかない。

４月とは言え、日も傾き始めると少し肌寒く感じる。
山道を下っている最中に、僕の足元が無くなった。

「スティーヴン許すまじ」

「スティーヴンを殺る時は、我が輩も手伝おう」

足元が消えたかと思えば、僕は一瞬のうちに業魔殿と転移していた。
もう何がなんだかわからない状態ではあったが、考えることを諦めた。
僕が帰ろうかと思ったとき、ヴィクトルさんに肩をつかまれた。

「少ないが、スティーヴンから報酬だ」

「十万…ですか…本当に少ない……」

十万とは言え、無いよりはマシだと思っておこう。
ヴィクトルさんが悪いわけでもないし、文句を言う相手でもない。
今後の金策を考えつつ、僕は帰路につくしか無かった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝三日目＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝　名前：御影　冬夜
＝　Ｌｖ：１２→１８

‖　種族：人間
‖　残ＭＡＧ：６２０
‖　魔貨：３７００
‖　日本円：三万九千円　↓　四千円　↓　十万四千円
‖　道具格納：鞄×１、無銘の刀
‖　鞄の中身：魔石×２０、ディスポイズン×７、洋服×２
‖　ペルソナ：モムノフ
‖　――――――――特殊能力説明――――――――
‖　【サマナー】：悪魔と交渉することが可能。
‖　【ペルソナ】：モムノフの召喚が可能。
‖　【剣術】：剣を利用した技を使うことが可能。
‖‖‖

＝＝＝

重ねがけ可能）
‖　・マハラギ：敵全体に火炎属性の小ダメージ
‖　・マハブフ：敵全体に氷結属性の小ダメージ
‖　・地獄突き：敵単体に銃属性の中ダメージ
‖　――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5588z/

冬夜転生

2012年1月7日00時47分発行